“Opportunities for Security Cooperation in Northeast Asia”

講　師 ：Peter Van Ness 氏（オーストラリア国立大学）

日　時：2010 年 5 月 7 日(金)　16:00－18:00

場　所： 慶應義塾大学三田キャンパス大学院校舎８階　東アジア研究所共同研究室１

言　語： 英語

概　要：

2010 年度第１回目の全体研究会は、中国外交研究において著名な Peter Van Ness 氏を招いて開催された。今回のテーマは東アジアをケースに、地域における安全保障協力について理論的に検討するものであった。

Van Ness 氏はまず、①人間の本性への理解、②現実主義的解釈の問題点、③パラレルな思考、の 3 つの論点を立脚点として説明した。①について講師は、乳幼児に対する生物学的研究や社会学の研究成果を参照にし、ホッブズが仮定する伝統的な選択・行動を否定し、人間が協調する可能性を強調した。さらに②では現実主義の仮定（無政府状態、国家主体、自力更生、ゼロ・サム等）や最悪のシナリオを前提とすることの限界を指摘し、協調しないことによる機会費用が軽視されていることを指摘した。そのうえで Van Ness 氏は、現実主義的なシナリオに備えつつ機会費用を考慮する「パラレルな思考（Parallel thinking)」が有用であると述べた。

次に Van Ness 氏は、現存するグローバルな脅威を端的に指摘し、東アジアにおける地政学を次のように解説した。最大の変化は米国の相対的な衰退と、それに対する中国の台頭である。このような情勢下で鳩山政権には、米中間のバランスを取りながら地域の諸問題を検討するための重要な役割を担う可能性と機会がある。現在の北東アジア情勢は新しい多国間協調枠組みを構築し、相互利益を創出するための基盤を提供していると言える。また Van Ness 氏は、多国間協調枠組みは継続的な関係国すべての参加から形成されるとし、その意味で 6 カ国協議を高く評価した。

質疑応答においては、各国の個性をどのように分析に取り込むか、6 カ国協議が失敗に終わったことの教訓をいかに捉えるべきか、添谷芳秀教授の「ミドル・パワー論」との相違について等の質問が提起された。Van Ness 氏は一つ一つの質問に丁寧に答えたが、特に「ミドル・パワーであるオーストラリアから見れば、日本は決してミドル・パワーではない」として、日本の役割に強く期待し、日本の自己認識を問うていたのが印象的であった。